

浄土

1981-12

昭和十年五月二十日
昭和二十四年四月二十八日
昭和五十六年十一月二十五日印刷
(第三種郵便物)
運賃着(特約)
第四十七卷





こ の 一 年

一年を振り返って想うことは、ただただ慌しさの中で、自分の性格のままに気づわく過してきたという感慨だけである。

多くの方々に、たくさん迷惑をおかけし、暖かいまごころのプレゼントもいただきながら、何のお返しもできずに、ただただ我武者羅に走ってきたという気持ちである。

十二月は師走の月。年もおしつまって、師もまたその忙しさにあちこちを走りまわるということから名づけられたというが、私などは、さしずめ一年中あわてふためいて走りまわっていたという次第である。しかも、あそこでころび、ここで怪我をし、といった具合で、まさに八面六臂の当り年でもあった。

その当り具合の中味に、いささかよいことのあったことも、またありがたいことでもあったが、ともかくこの一年を振り返って、改めて身をひきしめて、今、大いに反省するわけである。それが新しい年へ向けての新たな出発の糧ともなろう。

(勝崎裕彦)

十二月号



念仏はこれ弥陀の本願なり。
ゆえにこれを証誠す。余行は
爾らず、ゆえにこれなし。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.188)

目 次

法 話

この一年を振り返って……………野 口 善 雄……(2)

今年の懐古……………高 橋 良 和……(6)
—お待ちうけと日中友好の一年—

<随想>

一 万億土を跳んだ八メートルジャンパー……宝 田 正 道……(10)
—「スポーツ馬鹿」山田宏臣君の死を悼む—

(す)(い)(そ)(う)「つくづく」法師抄③

一向専修……………真 野 孝 信 ……(14)

ニシルクロードの旅ニ

砂漠の風物と敦煌Ⅲ……………山野井 貫 琇……(18)
—「莫高窟」管見—

浄土宗文献センター

一年有半覚え書き……………三 輪 晴 雄……(32)

詩・・・寒い冬……………清 川 宗 治……(36)

<童話シリーズ>

ぼだいじゅの実……………布 村 哲 哉 ……(23)

浄土句集……………一 田 牛 畝 邇……(28)

<表紙のことば> 金昌寺の慈母観音……………大 西 耕 三……(30)

<表紙裏・巻頭言> この一年……………勝 崎 裕 彦

念仏ひじり三国志⑨ —法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

この一年を振り返って



「一年の計は元旦にあり」と昔から言われるとおり、昭和五十六年の酉年を、大いにとんでみたいと、新春を迎えるに当り、種々の理想を織り込んだ一年間のスケジュールを組んで、胸を張って出発された方が、多いと思います。光陰矢の如しとか申しまして、月日の立つのは早いもの、なんとなく気忙わしい師走を迎えることになりました。さて、過ぎ去った一年を振り返って見て、思うように大いにとぶことができたであろうか、と言う

野の口ぐち善ぜん雄ゆう

(群馬県教区長
桐生市浄蓮寺住職)

ことになる、世の中のこととは、なかなか思うようにはならないのが、世の常なり、と申しまして、年度当初の意気込はどこへやら、己の努力の足らざることとは、棚上げしてしまうことが、多いようです。

昭和五十六年は、昨年の、高祖善導大師壹千三百年大遠忌の五十年毎につとめる大法要を、無事終了致し、明年の、法然上人降誕八百五十年の勝縁の年を、迎える谷

間の年に当り、大きな仕事を、無事仕終えた満足感と、精神的、肉体的疲労感から、ちょっと一服、と言ったような気持ちになるところですが、法然上人降誕八百五十年おまち受けの年として、諸々の角度から、この意義ある年を高揚せねばならない御膳立てに、休む暇もなく、力を注いで来たわけです。この努力の成果については、生誕八百五十年の舞台が、開幕される明年でなければ、わかりませんが、要は、浄土宗の教師、信徒、関係者一同が、お念仏の信仰に生き、宗祖法然上人に対する強い報恩感謝の気持を持って、己の足らざるを棚上げすることなく、精進努力することが、必要であると思います。

すでに組織されました法然上人降誕八百五十年慶讃事務局が、たてました実施要領によりますと、法然上人降誕八百五十年慶讃法要が、一宗法要並びに各総大本山法要として、昭和五十七年四月中に、三日乃至七日間の期間で厳修されますほか、各地区教化センター、各教区におきましても、慶讃法要並びに大講演会が、開催され、また、法然上人の御徳顕彰記念事業として、青少年教化育成事業、記念出版、各種教化団体による、映画の製

作、ポスター、幼児向生誕歌等の歌曲、法然さま人形、自動車用ステッカー、ワッペン等の製作、また、ラジオ放送浄土宗の時間として、「わたしたちの法然さま」「いのちを考える」等のタイトルの準備も、この一年の間に、着々と進み、全国の全浄土宗寺院に、このすべての計画伝達も、終了致しております。大いなる成果を期待しております。

浄土宗の御本山は、総本山の京都知恩院、大本山の東京芝増上寺、京都百万遍知恩寺、清浄華院、黒谷金戒光明寺、福岡県久留米市善導寺、神奈川県鎌倉光明寺、長野市善光寺大本願と、一総本山、七大本山の計八つの本山がございます。何れの御本山も、全国浄土宗檀信徒の信奉するところではありますが、長野の善光寺は、他の本山と形態が異り、天台宗と共同管理にて運営されており、善光寺大本願が浄土宗の大本山になっております。何れの御本山も、昨年の、高祖善導大師沓千三百年御遠忌、並びに明年の、宗祖法然上人降誕八百五十年の、二つの勝縁にめぐり合い、善導大師と、和順大師法然上人の、二大師御徳慶讃法要及び、記念事業実施の資金として、全国各地の浄土宗寺院を通じ、檀信徒皆様より、多

額の淨財の御寄進を頂戴いたしました。御陰様で、各御本山も、境内地並びに建物等についての整備が、本年末迄に、大変整つてまいりました。御本山ではありませんが、明年の、法然上人降誕慶讃活動の中心になると思われ、法然上人御降誕の地に建てられました、岡山県久米南町の誕生寺も、整備が進められております。これもみな、宗祖法然上人の、御徳の然らしむるところと存じ、深く感銘致しております。

浄土宗を開宗されました、宗祖法然上人の御幼名は、勢至丸と申しますが、この勢至丸が、長承二年四月七日、美作国久米南条稲岡庄、つまり現在の岡山県久米郡久米南町の地に押領使漆間時国を父とし、秦氏を母として誕生致しましてから、明年が、八百五十年になると言う訳です。宗をあげて、慶讃の大法要を厳修致すべく、準備態勢も、この一年の間に、ととのつてまいりました。

さて、浄土宗の宗政を担当する武田内局が、法然上人降誕八百五十年慶讃の諸事業の準備を整える作業のほかに、武田内局の当面の課題である宗務庁舎の建設、並びに、一宗機構を時代に即応させるための、宗綱宗規の見

直しをする件についての動きは、どうであつたらうか。宗務庁舎の建設については、宗令第五十五号浄土宗宗務庁舎建設委員会規程により、委員会が誕生し、すでに、十一月二十四日開催された委員会をもって、四回の委員会が、開催されております。しかし、未だ進展を見ておりません。第六回浄土宗宗務庁舎に関する調査審議会の答申書にもとづいて、庁舎建設の場所の認定について、行き詰りを生じております。答申書によりますと、現在の宗務庁の主たる事務所の建物は、借物であり、狭隘且つ危険度が甚しい為、庁舎としては、不適當であり、早急に処置すべきである。主たる事務所及び従たる事務所を、東西いずれに設置するかは別として、東京と京都の二カ所に、分置すべきである。新たに設置する宗務庁舎の規模及び形式は、浄土宗の伝統ある風格を内外に示し得る庁舎であり、新時代の事務機能を、導入出来得る設備を、備えた余裕あるものでなければならぬ。床面積は、三、三〇〇平方メートル以上のものが望ましい。宗祖降誕八百五十年慶讃年度である昭和五十七年を、目途として、完成でき得るよう努力されたい。建設の場所は、林下町四〇〇番地地内であること。等々、望ましい

宗務庁舎の理想的姿が、うたつてあります。種々の問題があることは、理解できますが、建設委員の諸師が虚心胆懷、明朗なる企画と実施策を、一日もはやく示され、宗務庁舎建設の問題を、速やかに解決していただきたいものです。

宗綱宗規、諸規程の見直しの問題についても、宗務庁舎建設の問題を解決し終えることができれば、宗を挙げ、とりくむことが、できるものと思われれます。

最後に、新聞紙上を賑わした、一般社会に目を転じて見ますと、ロッキード裁判の駆け引き、銀行強盗、女子行員の使い込み、暴力団の問題等、末法の到来を思わせる凶悪の犯罪が、毎日のように掲載され心ある人々の、胸をいためてまいりました。これらの社会悪の中で、特に私達が、注目せねばならない問題は、次代を担う青少年の問題であります。家庭内暴力、校内暴力、女子高生の売春、暴走族等の問題がありますが、これらの問題は如何にして生じ、また、どうしたら解決できるでしょうか。原因はいろいろあると思われれます。しかしその中で、最も憂えねばならないのは、今日の教育のあり方

であると、思われます。「物で榮えて心で滅ぶ」と云われる日本の現状で、人間性の回復と道徳教育の徹底を図るための、教育内容の改善が、根本施策であります。学校教育も家庭教育も、大切ですが更に、生命尊重、報恩感謝、相互信頼等の宗教的情操を植付ける、宗教教育こそ、今日の青少年に必要な教育であります。物質さえ豊かであれば、お金さえたくさんあれば、と物本位に追求しましても、人間の欲求は無限です。欲のためには、他人の迷惑など省みません。生命を軽視し、罪の意識が麻痺してしまいます。この悪の芽をつみとめるのではなく、悪の芽の出る前に、正しい心の教育が必要なのです。

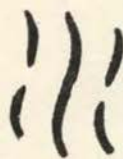
三つ子の魂百まで、幼児のうちに、宗教教育を施すことが、最も効果的であります。

今こそ宗教の出番です。法然上人降誕八百五十年の勝縁にあたり、弥陀の御慈悲をいただき、明るく、正しく、仲よく、生きぬいて行くお念仏の教えを、多くの人々にお伝えすることこそ、宗祖法然上人の御徳に、おこたえする報恩行でありましょう。

今年の懷古

——お待ちうけと日中交友の一年——

高橋良和
たかはしりょうわ



日中友好の企画が各宗でどんどんすすめられた年である。うれしいことにどの宗派もその根源はインドに、そして開花は中国においてなされたことから、我が国の仏教各宗とは中国の祖師によってがっちり結びついている。

真言宗では各派が拠金して弘法大師の勉強の地に堂塔を建てることになり、その募金も集りつつあり、使節団も各派の代表を送って実際を見聞した。その費用二億であるが大丈夫らしい。

臨黄の代表団も臨済塔の修理のために、二千万円を中国仏教協会に贈って、その復旧に力を入れるという。

天台宗では天台山国清寺に、天台智者大師、そして道邃、行滿両師の顕彰碑を建立することになり、併せて伝教大師の記念碑も建てることを決めた。各宗の目は中国に向けられていて、祖師の遺跡の顕彰に力を入れていることがよくわかる。この一年は日中友好に力をつくしてくれているが、明年はそれらの計画が地につく年であらう。

我が宗もいち早く日中友好に積極的な姿勢を示して、西安の香積寺の善導大師雁塔の修理、そして本堂の建立などを中国仏教協会の協力でやりあげてもらったので、その莊嚴をはじめ、善導大師の御影の安置、あるいは太原の玄忠寺に莊嚴具や塔籠の寄進など一億余円の金額を贈ってその顕彰につくした。

どの教団でも全く中国ブームであって、中国に出かける宗派毎の団体が非常に多くなってきた。

中国を考えずして教団の存在はあり得ないといった昨今である。日中友好ということからするとうれしいことであるが、中国仏教協会も大変なことであろう、その世話で。

そして同和問題に対しても、昨年来の積極性がさらに活発化して、各教団によるその研究対策委員会が組織され、各教派においてもこの推進に力を入れているので、非常にまとまってきたのはなによりである。それだけに今後の動きに充実したものがみられることになると思う。

真宗教団といっても、大谷派であるが、やっとおちついてきたかのようにみえた東本願寺と大谷派、すなわち

法主側と内局との対立はまたまた火を吹いた感じで、その解決については政情を待つより時間がかかりそうである。

そして浅草別院といわれた東京本願寺が、大谷光紹門主によって独立宣言して、その奉告法要も行なった。全国に大谷派から離脱した寺は、二百七、八十カ寺だそうである。東本願寺は大谷派の包括団体であるので、今後は東本願寺を本山として一つの包括団体を形成することになるようである。すると大谷光紹新門主は、大谷派からその籍が消されることになる。かくして法主と内局との対立はいよいよ深刻であって、報恩講の法要にまで影響があるのは、門徒にとっても耐えられないことであろう。

各宗団にはそのような苦悩をもっていないのが、なによりであって、祖徳顯揚では日蓮宗の身延山久遠寺の本堂が、四十億の予算で着工しているが、その募金は同宗関係の新教団や、信仰団体からの寄付で、各宗にみられない協力が目立っている。

我が宗は門主に就任し二年近くなった高島寛我門主の晋山式と、その披露の祝宴が六月に執行された。入山後

今日までのびのびになってきたのがやっと実現してほつとしたことであらう。九十四歳の高島門主が健在であるのはなによりである。

鶴岡隆玄執事長の喜寿祝賀会が、各宗団の総長や、宗内外の要路の人々の発起で十月京都で開かれ、三百六十余名の来会者があり、感涙した同執事長が、心よりほとばしるあいさつをしたのが印象的であった。

明年にひかえた法然上人お誕生八百五十年を待ちうける今年は、いろいろな企画がなされたが、知恩院ではアニメーション映画の「法然上人」が完成し、全国各地で上映されて好評であるとのことであるが、その試みとして京、阪、神の三大都市のホテルのテレビにもそれが放映され、真実の上人像がブラウン管にうつることになった。一つの試みであるから、すぐさま好評とはならないまでも、多くの人々に法然上人を知らしめることは、まことにありがたいことであつた。この企画に対しては大いに称讃したい。

行政面においては、宗務庁舎の建設計画が表面化して実務に入った。建てる意志充分であるが、その場所が知恩院の境内地を借用するということで、本山と宗務との

間の交渉がまだ結論が出されていないのが気がかりである。

帯に短かし、たすきに長しといった場所の問題であるが、この分だと接渉にまだ当日時が必要らしい。金の問題でなく、その場所の問題である点がむづかしいものがあるのだろうか。

各大本山の法主の海外への巡拝も今年は多かった。黒谷の稲岡法主は毎年の如く中国に友好団を連れて赴いているが、今年は増上寺の藤井法主も同行した。両法主が揃つての日中友好の機会をもつたことは珍しい。また百山の林法主は御山の参拝団を引率して、これは中国から、インドへと大陸縦断という旅を見事に終えた。各地の霊蹟では、林法主が講演する、ということが魅力で、参加者も多かった。

各地区の日中友好団の派遣とインド巡拝は、非常に多くなつてきた。ちよつと数えてみても、大阪、千葉、山口、奈良、静岡などをはじめとした教化団、浄青などが中心となつて、どんどんと中国とインドに赴いているのであるが、それぞれそれなりの成功はあつたことと想像される。

宗務庁の慶讃局では、明年のお誕生八百五十年を前にして、テレフォン布教が行なわれた。各地区の教化センタ―が今キー・ステーションになっているが、割合いにこれを聞く人が多くなってきた。また宗務だけでなく一寺院でもこのテレフォン法話がなされているが、布教に対する密度という点では、たしかに我が心に訴えられている感じがするので好評である由。誰も知らないことがあるが、短波放送でもほんの短かい時間、「バツチリセブン」という時間がある。このような放送のあることも知るべきである。放送といったものは継続することに意義があるので、誰かが何処かで聞いている、ということもこの番組の特徴であろう。継続することがなによりである。

中国仏教協会から、京都の仏教大学に、留学生が二人やってきた。日中友好ということの実現である。仏大の専修科の学生とともに起居しているが、今度はこちらから中国に人を送ることになると思う。真の友好はこれらの留学僧が受けもつことになるかもしれない。

大正大学はハワイ大学と親善提携して、今夏はそのゼミをハワイ大学で開いて、代表が参加した。仏教大学は

韓国の大学と姉妹関係をもつて、毎年交互にその学会を開いている。我が宗の東西の大学がそれぞれ海外の大学との交流がなされている。

明年にひかえた八百五十年を前にして、一宗の青少年教化運動は、活発になった。各地区ではよい子の集い、あるいは子供の研修会などが盛んであり、特に児童教化連盟や、ボーイスカウト連合協議会などの研修が、地方で開かれているのが目立った。

知恩院のおてつき運動の子供奉仕団も、比叡山上の青竜寺の修練道場の増築が完成したので、収容力も増え、その上男女学生にも開放出来るようになったのは、今後の青少年教化に大いにその力を発揮することになると思う。

宗務から出版する文書布教も、今年は特に青少年向のよみものが多くなってきた。これは明年までつづくことになるだろう。

昭和五十七年四月、これを目標に宗門全体の動きが活発化してきたのが、この一年であると思う。

十萬億土を跳んだ

八メートルジャンパー

——「スポーツ馬鹿」山田宏臣君の死を悼む——

宝田正道

(浄土宗出版室長)

走幅跳で、日本人として初めて八メートルを超える記録を樹立した山田宏臣君が、去る十月二十一日、急逝した。まだ三十九歳の若さで、死因は脳血栓ということである。それも遠く異郷の地(韓国慶州)で、アツという間に息を引取ったらしいから、最期をゆっくり看取る暇もなく、夫人をはじめ肉親や知友の愕きや悲しみはどんなであつたらう、と思うと一層胸が痛む。心から深く弔意

を捧げて冥福を祈りたい。

私は、つい二カ月ほど前のこの夏、同君のスポーツ談義を聴くために『浄土宗新聞』の企画で、元気な彼と対談したばかりである。今にして思えば、それが彼と会った最初であり最後であつた。まさに一期一会の結縁に他ならない。

その日、彼は彼を育てた師でありコーチでもあつた日

本陸上競技連盟理事強化委員長の朝隈善郎氏（京都一番館主）に伴われて、浄土宗東京事務所まで足を運んでくれた。ちょうど慶州東急ホテルの総支配人として赴任する直前の忙しいひとときを割いての来駕であった。

一八一センチという恵まれた長身に、紺の背広をスマートに着こなし、朝隈氏と並んで第一応接室のソファに坐った山田君は、いかにもスポーツマンらしく、礼儀正しく、しかもてきばきと卒なく、明るい声で丁寧にこちらの質問に答えてくれたのが印象的であった。

初対面とは思えぬ和やかさの中で、約二時間にわたり、師弟は交々、新記録を出すまでの試練と苦闘の模様を熱っぽく語ってくれた。その内容は『浄土宗新聞』九月号に収載したとおりであるが、何よりもここで紹介しておきたいのは、彼の鍛練が総本山知恩院を舞台にして行われ、結局、それが実を結んだという事実である。

山田君が八・〇メートルという、前人未踏の新記録を樹立したのは、昭和四十五年六月七日、小田原で行われた実業団、学生対抗陸上競技大会においてである。そ

れまでの日本記録は、一九三一年に南部忠平氏が出した七・九八メートルというのが最高で、当時世界新記録としてマークされていた。爾来、三十九年間、日本人としてはだれ一人、この記録を超える者はなかったのであるが、山田君は三センチこれを上回る大記録を出して、日本の走幅跳を八メートルの大会に乗せる快挙を成し上げたのである。実に足かけ四十年ぶりの更新である。

その差わずかに三センチとはいふものの、この三センチに、文字どおり彼は生命を賭けてトレーニングに励んだわけである。コーチの朝隈氏も必死であった。京都在住のため、氏は近くの知恩院の石段に注目、ここを主たる練習場を選んで、朝夕、大殿横の法然上人御廟につづく石段跳びを彼に課した。急な坂になった石段を跳んで登ることは、肉体的に跳躍力や瞬発力を養成するに役立つが、同時に宗教的霊場を背景とした四辺の雰囲気、パーベルやグランドでは味わえぬ精神的な集中力の練磨に際立った効果を及ぼしたであろうことも、見逃してはなるまい。事実、彼自身も述懐しているように、ハアハアした荒い息遣いで石段を駆け上りながら、本堂から聞えてくる木魚の音や、すれちがうお坊さんが合掌してく

れる姿などに接するたびに、なんともいえぬ精神的充足感が湧いてきて、気力の引締る思いがしたそうである。

しかし、トレーニングは厳しく苛酷であった。何しろ、石段登りの他に、百回単位の腹筋運動の腕立て伏せに耐えねばならぬ。山田君は「殺される」と思ったこともあったそうである。その上、七・九三メートルまで出した後は一向に記録もののびずの石段登りの効果に疑問さえ生じて、しまいいには「いっそ引退したい」といい出すほどの「壁」にぶつかったことまである。

その都度、朝限コーチの叱咤激励にあい、自分でも、「このまま止めたなら朝限夫妻にご恩返し一つできず、男としてダメになる」と思い直し、開き直った気持で、やっと苦境を克服、石段登りを続けたという。

その代り、小田原で新記録だと知らされた瞬間、「もう死んでもいい」と真剣に思っただけだそうである。

彼はこの勝利を、もちろん朝限コーチの鍛練の賜物と感謝しているが、また、知恩院という霊場を借りて練習させてもらったおかげと受け取り、「法然さまが見守っていてくれたように感じますね」ともいっている。彼は文筆にも巧みで、後に『スポーツ馬鹿、地獄へのジャン

プ8メートル』という半生記も書いて、その苦闘ぶりを細かに報告している。

ともあれ、自らを「スポーツ馬鹿」と称し、「地獄」の責め苦に喘ぎ耐えながらも、稀代の偉業を成し上げた山田君の精神力は、天性のエネルギーな助走や豪快なバネ以上に逞しいものがあつた。その根源は、知恩院という浄土宗のメッカで培われたことを思うにつけても、「馬鹿」に徹しなければできないことである。奇しくもそれは、法然上人が、「愚」に還れと教えられた心のあり方と軌を一にする。彼は、「馬鹿」になりきって石段登りに精魂を傾けた。そして宗教的雰囲気から自然に「愚」に還る信仰の境地を肌で感得したものといえないだろうか。だからこそ、その底力が法爾自然に大会で発揮されたことも考えられるのである。

記録は破られるためにあるという。事実、彼の記録も、九年後の昭和五十四年には、同じ順天堂大学の後輩である臼井淳一選手によって九センチも破られた。

しかし、そんなことはどうでもよい。山田君の強い精

神的集中力というものが、信仰的な環境によって育はぐまれたことだけを記憶するだで十分である。逆にいえば、単に走幅跳だけに限らず、野球でもなんでも、スポーツ一般にとつて、体力や技能以上に、体・技・心の心、それも宗教的に裏付けられた不拔の精神力が、いかに大切であるか、山田君は身をもって実行してみせてくれた、といつてもよからう。

彼はこうして第二の人生への出発に当たつても、知恩院で仏前結婚式を挙げ、信仰の糧を身につけた有為な社会人として将来を囑望されていたのである。そしてわずかに十年足らず、韓国慶州東急ホテル総支配人としての赴任は、まさに飛躍の第一歩であつたのである。「地獄」の助走路から、人生の荒海へ踏切る勇壮なジャンプ姿勢そのものであつた。

にもかかわらず、天は彼に「時」を藉かさなかつた。彼はハメートルどころか、なんと十萬億土を一挙に跳び越えて、西方浄土へと、いきなり穢土を後にしてしまつたのである。

惜しい人材を失つたものである。

しかし、彼の名は永遠に、「日本人初のハメートルジ

ャンパー」として世界の歴史に刻まれることだろう。彼の「地獄」との闘いぶりも、若き後輩たちへのよき教訓として伝えられ、受け継がれていくことを、私は切望する。好漢山田宏臣君の死をむだにしないためにも、それが一番の供養であると思う。

ああ、山田宏臣君の靈よ、安らかに眠りたまえ。

合掌

|| 好評 ||

△幼児用▽ 教育えほん

『ほうねんさま』

B5判、表紙共一二ページ（カラー刷）

定価三〇〇円（送料実費）

申込先――

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十一―六

大道社

(す)(い)(そ)(う)

「つくづく」法師抄(三)

——一向專修——

朝夕の底冷えを云う間に、冬枯れの庭に落葉も少なくな
って、今年もいよいよ十二月、時は人を待たずと知りな
がら、恒例のようになってしまった節季せつきごえ声を出して、事
を運ばねばならぬ自分が恥はづかずかしい。そんなに怠けた積つみ
りもないが、論より証拠の気忙しさは、どうしようもな
い。「つくづく」不精の累果が身に泌しみみる。随煩惱ずいぼんのう(根
本煩惱に随したがって起る煩惱)と名付けられる懈怠けたい(なまけ)の
みじ目を、今年も味あじってしまった。

煩惱は、頑強でしかも執拗な力をもって固着してい
る。それは外部よりの襲来と、内部より湧わき発はる内外両



真まの野の孝こう信しん

(八幡市正法寺住職)

面の呼応である。このことは、十二月八日、仏陀世尊が
菩提樹下に於て開悟せられた成道の聖日であるが、頑強
な魔軍の襲来と、執拗な三魔女の接近に対する仏陀の苦
闘を説く『因果経』の「悪魔降伏説」が証あかしすところでも
明らかである。今も、伽耶がやの大塔に残る金剛宝座に参拝
させていただいた者にとって、何とも云い得ぬ靈氣の中
に、暫し、往古三千年の時を異時の即今に呼び戻して、
今現在いま座ざの仏に目見える心地にさせてただける応化
に浴し得たことは、生涯の果報として、また無上の法悦
でもある。

では確かに数えるが、その後は次第に不確實になり、新年の挨拶時に、「大晦日の鐘は、一つ少なかった」とか、歳によつては「二つ多かった」等とおっしゃるので、

「寺では、絶対に違わぬ方法で撞いておりますよ。」と応ずる等、正月早々から煩惱除滅の鐘の数をめぐって煩惱作りをしている次第でもある。然し今では市議会議員その他の有志が集って撞いているが、懐しい思い出となった老夫婦も、天寿を全うして西往の人となり、その第十三回忌もおわってしまった。私は、「数を取って煩惱作りをすること止めて、耳に達した一音毎に南無阿弥陀仏と拝受し、床の中のこの私の耳にも、仏音のお届け有難し、と承知すれば」とお勧めして悦ばれた。

偕而、十二月は仏名会の行事月で、私は六道講式によつて阿弥陀経の六方諸仏を礼するのであるが、六道の一人々の衆生に回向しながら、その一人の回向が、私自身の願生浄土となり、自他共生極楽の称名礼拝をさせていただけることが有難い。歳末に際し、過去・現在・未来の三千仏名を称える懺悔の法会は、人の世の特に仏徒に欠かせぬ行事として伝承された尊さも、その励行薄れゆくは残念である。

惟^{すなは}うに、高祖善導大師の往生礼讃を唱えさせていただくにつけても、最後には、

「四恩の法界と共に極楽に往生を得せしめ給えと、先づは師僧、次には父母を、三には善知識、四には衆生を挙げて、貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱障と、十惡五逆の業障と、地獄・餓鬼・畜生の報障の三障を断除して、阿弥陀仏国に往生せん。」

と、帰命し懺悔させていただき、それに続いて、
「十方の諸仏に帰命したてまつり、至心に懺悔の誠をささげて、罪過を想起して、謝罪し懺悔し、自ら覚知（おぼえ或は気付き）なき無数の作罪、その一切の罪根を滅し給え。」

とひたすらに請い願って、五体を投地して仏の両足を頂礼させていただく法縁は、仏徒ならではの有難いお勧めでもある。

仏のみに対坐させていただき、仏の顔を仰ぎみて合掌低頭する時、常に其の座は、「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し常に流転して、出離の縁有ること無し」（散善義）の経説は、今、現に前に在^ありますみ仏の、この罪業在身の私えの御説法を

戴かせていただく道場であり、仏の直説を聴聞させていただく御法座である。

仮令、仏像を奉祀することなき場所であっても、称仏の場はみ仏来臨の仏座である。この仏の御説法は、そのまま私の自己反省による慚愧となり、期せずして内に湧出する渴仰の誠信（真実心）に、高祖善導大師の説示し給うた要・略・広の三品の懺悔が、この私の為にこそ促し給う慈父ならではの勸奨の如くに慕われて、身中に輪血の如き脈打ちを覚えさせていただける。——南無阿弥陀仏。

元祖大師法然上人が、一心専念の文（善導大師観經の疏）に豁然として開悟し給うたことによる浄土宗開宗もまた、「凡夫の浄土に生れんことを示さんがため」との仰せをいただくとき、善導・法然の両大師は、「自他法界同利益、共生極楽成仏道」の大乗悲願の成就身両大師にましますこと、心に泌みて有難い。

「念々称名常懺悔」「一声称念罪皆除」の仰せも、懺悔の為の念仏（称名）の声ではなく、「願往生の念仏であって、敢えて懺悔法を藉らずとも、阿弥陀仏に打ち任せて至心に信樂して、帰命投地する」「心に助け給えと存じ

て、口に南無阿弥陀仏と称える」その功德によって、湯の雪を消すが如く罪障消滅し、自然に発心されて、一層の称名に励む生活が展開されてくる。業務精勵の日暮しに、諸仏菩薩の護念を蒙り、延年転寿の利益をいただくせていただく信仰は、蓋し浄土宗独自の要信である。第二祖鎮西上人も、「念仏の実修に当っては、所造の罪体に目をかけず、只平らに仏助け給えと、南無阿弥陀仏と称うれば、名号に滅罪の徳あるが故に、自づから滅罪往生すべし。時時尅起す所の妄念造悪によって念仏往生に就ては疑を起すべからず。」との御勸誡をお遺し下さっている。

浄土宗の懺悔は、無懺悔の懺悔とも、懺悔せざる大懺悔とも云われる所以を肝に銘じて、「唯一向に念仏すべし」の元祖大師の御遺訓を素直に戴く一向専修の余生とさせていただきます。

合掌

南無阿弥陀仏

「つづく」法師

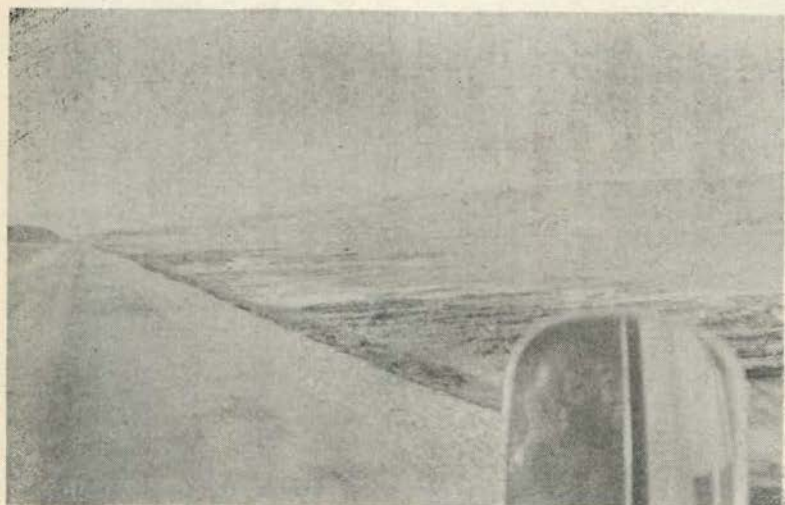
砂漠の風物と敦煌——「莫高窟」管見——ⅧⅢⅤ

やまのい かん しゅう
山野井 貫 琇

(長野市常然寺住職)

窟中の遺品について目を見張った作品は団員それぞれ異ったであろう。第二百七十五窟の本尊交脚弥勒菩薩像は北魏という最古の一級品、第四百二十八窟東壁サツタ太子の本生図、スダーナ太子の本生図などその他、大きなスケールをもってわれわれに迫った。だが私の心を引いたものは第三百二十一窟西龕天井に描かれていた「阿弥陀来迎図(初唐)」であった。美しい西方浄土の世界が天からこの世に降って沸いたかの感じさえした。上品下生の阿弥陀如来の頭上を飾るには最適の絵である。仏菩

薩の乗り給える雲の裾は風に靡き、飛天の衣紋も長く尾を引いて、このスピードこそ知恩院の早来迎にも似て救済急なる極楽の弥陀の大悲が現世に迫っている。日本において、平安末の戦乱絶ゆることのなかった時代に弥陀の来迎を願った民衆数知れず、まして今こそ静かな田園都市である河西の砂漠の町々も、昔の時代はそれなりに匈奴、鮮卑、吐蕃、突厥その他の抗争が烈しく、多くの人民は死の世界に沈淪することのいかに甚しかったか想像に余りがある。そんな時に西方を欣求する、しかも急



—莫高窟街道〈右、鳴砂連峯〉—

であることは当然なことであつたと思いを回らしてみ
る。

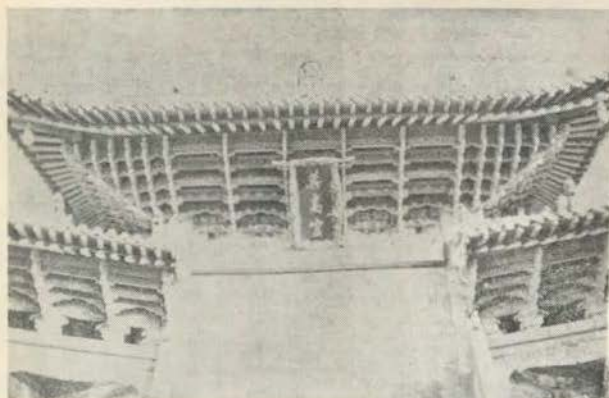
せめてこのような時代において、無量寿経や観経、そ
して阿弥陀経の根本思想が影響したことは十々承知の上
で、更に私の愚見を出してみよう。当時の民衆の心奥に
いま死を目にして快楽を求める心もあつたのではなから
うか。第二百二十窟南壁西方浄土「胡旋舞」初唐」に、
また第一百十二窟南壁阿弥陀浄土變の琵琶を背にした「伎
楽天」中唐」に、そのような気がしてならない。戦々恐
々とした日常生活のなかに、西方浄土を少しでも美化
し、より楽しんでみたい。そのような心境が表現された
変相が多い中に、これはその代表にも思える。

「胡旋舞」というのは、昔中国地方に住んだ蕃族胡人
の女が片足を挙げて旋回する舞姿である。唐の玄宗皇帝
はその美しさに魅せられて、長安の宮廷内に舞楽の研究
所を設けて、漢族の子女にもこれを奨励したとさえいわ
れる。舞は女性に限る。そして一般民衆の快楽を保つこ
とは現代も同じである。更に「伎楽天」においては、琵
琶を左手で背にして胡旋舞をなしている。一層の郷愁を
そそるようである。今、机を前にして黙想する時、大き

なスケールで私に迫ってくるのである。それにはまた大きな理由がある。帰路の十月十二日(日)夜、蘭州の劇場において観覧した歌舞団は本当に美しかった。

「糸路花雨」シルクロードの花の雨」である。この歌舞劇は中華人民共和国成立三十周年を慶祝して演出された、甘肅省歌舞団の創作舞踊劇である。一九七九年十月北京において初上演がなされ、その後上海、広州、香港と順次公演され、今宵は地元の蘭州において公演されたのを私たちも観劇に及んだのである。全六場に序幕と尾声がついた華かな歌舞は、二時間余に及び、一昨年北京において見た京劇「楊門の女将」にも増して、全観覧者を魅了させたのである。そのあら筋は、唐の時代神筆張という画工と英娘という父娘がいた。或る日のことシルクロードの砂漠で病に苦しむベルシャ商人イヌスを救った。彼はこの親切な父娘に感謝して立ち去った。ふとしたことで美しい英娘は人にさらわれた。第一場、数年の後、父は敦煌の市場で英娘を見つけたが、その時の英娘はサーカス団の第一等の舞姫となっていた。折りしも再びやって来たイヌスの財力によって娘をとりもどし、父娘は再び一緒になることができた。第二場、画工神筆張

は娘の舞い姿を莫高窟に美しく描いた。これぞ敦煌壁画の代表作、琵琶を背にした胡旋舞の伎楽天である。その頃巧妙な官吏市曹は美しい英娘を占有しようと狙ったが、娘は彼を嫌い、為に父はイヌスに托してベルシャに逃避させた。怒った市曹は神筆張の手に鎖をつけて画窟に閉じこめた。第三場、一方英娘はイヌスの元で楽しく生活していたが、イヌスは再び唐に使うことを知って、妾も国に帰りたいと申し出る。第四場、父神筆張は娘を案じながら窟内に不自由な生活を送っていた。折しも河西節度使がやって来て伎楽天のすばらしい絵を見た。これが彼の筆になることを知ると、彼の鎖を解いて自由の身にしてやった。第五場、英娘を伴って旅をしてくるイヌスを襲おうと企てる市曹の計画を知った神筆張は、陽関烽火台に登り火をつけて警報したために、自分は殺されたが、お蔭でイヌスの一行は事なきを得た。第六場、やがて敦煌で二十七カ国交易会が開かれた。その時英娘は節度使の前で歌舞に託して市曹の罪状を訴え、ためにシルクロードの隠患は除かれた。そしてシルクロードには花の雨が降り、以後中外人民の友誼は絶えることなく千秋も続いていたことである。



—莫高窟牌樓屋根部—



—第四場—

河西への出発点でもあるこの蘭州において、今回好運にも中国人民と共にこれを観劇できたのも、また深き縁によるものと感銘の深いものがある。この執筆創作に当っては超之洵等の多くの関係者は、莫高窟所長常書鴻氏の配慮を仰いだのである。想像も及ばない千五百年もの

昔、ラクダの隊商などと共に多くの人々が、このシルクロードを往来して洋の東西を結んだのであるが、それは決して安易で楽しいものではなかった。道はない、水は意に任せず、空には飛ぶ鳥もなく、風は強く砂は舞い、戦乱の絶えなかったこの地において決して命の保証

はなかった。そのような中に人々は心の安住を求め、往来する旅僧の説法に耳を傾け、仏心を抱いたのも当然といえよう。未来の理想を西方浄土に求め、宝池の上に乗しい妙音を聞き、美しい鳥や優しい舞を見る。苦しみの中の求樂は浄土三部經の所説と混然一体となっていたことを、阿弥陀来迎図、胡旋舞、伎楽天などに代表してこれを見たのである。

今回の旅に当たって、主催した中外日報社と担当した日中旅行者はもちろんのこと、時々関係寺院などの解説を賜った团长牧田諦亮師をして現地を全日にわたって引率してくれた中国国際

旅行社の劉芬珍女子の親切な配慮には並々ならないものがあつた。その他のガイドや運転手、そして多くの現地人の善意によつて団員一同は更に協力一致、無障礙^{むじょうざい}で期待にも増して大きな成果を収めた。前回の訪中にもそうであつたが、中国八億人民皆は大阿羅漢である。神筆張

のように利他のため己れを滅する、寛大で大乘的な心、阿弥陀如来のような大慈悲心の持主の多いこと、性急な日本人の太い学ぶべき点でもあろう。広大な国土は民をしておおらかにした。善良なる中国よ、永世子々孫々にわたつて栄光あれと祈つて筆をおく。

◆◆◆ 浄土句集 欄への投句のお願い

— 及び俳文等の寄稿のお願い ◆◆◆ —

『浄土』誌本文中のオアシスともいふべき、『浄土句集』欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この『浄土句集』欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いいたします。

- 一、内 容 俳文、句会便り等の随想
- 一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度
- 一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会

ぼだいじゆの実

お釈迦さまのいらっしゃったところの話である。

インドのある村に、ほとけの教えを信じて暮している人々がいた。

その中で、カンダという若者だけは違う。

カンダには、多くの財産、そしてやさしいおよめさんと、一人のかわいい子供がいたのだが、どうしてかほとけの教えを信じようとしない。

そんなある日、この村へお釈迦さまがいらっしゃるこ

布^{ぬの}村^{むら}
哲^{てつ}
哉^や

とになった。

人々のなやみや、苦しみを取り除いて下さるお釈迦さまが、おいでになるといので、村の人達は大よろこびだ。

広いインドのこと。

お釈迦さまにお会いして、しかもお話を、うかがえることなど、めったにあることではない。

お釈迦さまを拝み、その教えを聞いて、心の支えにし



たかったのだ。

大勢の人が、それぞれに心をこめたお供え物を持って集った。

およめさんと子供が行くというので、カンダも、しかたなく出かけた。

だが、お供えの物を、何も持たないので、およめさんが、たずねた。

「よその人は持って行くのに」

「いいんだよ、ぼくたちには、お金はあるし病気はないし、それに若いんだもの。もらうものはないさ」

カンダは、ぶっきらぼうに答えた。

やがて、お釈迦さまが、おつきになった。

そまつな身なりのお姿ではあったが、拝むだけで、すがすがしい。

お釈迦さまの、お話が始まる。

生きて行くための、道しるべを教えてもらい、心のあかが洗い流されて行く。

こんなに、うれしいことが、他にあらうか。

そこにいるだけで、なんともいえない良い心持ちであった。

みんなは、持って来たお供え物を、思いおもいにさし出した。

そんな光景を、ちょっとはなれたところから見ているのは、カンダとおよめさんと子供だ。

「あなた、せっかくだから、もっとお釈迦さまの近くへ行って、お話を聞きましょうよ」

およめさんが、子供の手を引いて、前のほうへ行こうとするので、カンダがいった。

「ぼくは、ここにいますよ。行きたければ、お前たちだけで、行ってくればいい」

およめさんは、どうしようかと迷っていたが、子供が引っぱるので、おずおずと進み出る。

そして拜んだ。

お釈迦さまの言葉はひとことひとことが、かわいた砂に水がしみ込むように聞く人の心にしみる。

生きるのぞみが、わき上ってくる。

まったく不思議だ。

およめさんも、子供も同じであった。

そんな様子を、一人で眺めているカンダ。それはやっぱり寂しい。

名残りおしくはあったが、お釈迦さまのお話が終つた。

そして、いつでも、どこでも、そうであるように、集つた一人一人にお釈迦さま手ずから、ぼだいじゅの実をくださる。

年寄にも、若者にも、子供にも、男にも、女にも、身体の不自由な人にも、病人にも、お供え物をした者にも、しない者にも、ひとつぶづつのぼだいじゅの実を。

「あなたも、いただいたら」

はなれて立っているカンダへ向つて、およめさんが呼んだ。

「ぼくは、いらない」

きっぱりという、カンダではあったが、どこか悲しい。

「もう二度と、お会いすることもないであろうお釈迦さまが、直接に下さるという有難い実なのに」

およめさんは、いかにも残念そうだ。

「おとうさん、もらえばいいのになあ」

子供にもいわれて、心のゆれ動くカンダではあったが、いまさらくさいともいえない。それに、わざわざ

話を聞いて、その上に物をもらうなんて。

そんなカンダの気持を、ずっと見通していらっしやつたのは、いうまでもなくお釈迦さまである。

ひとり立っているカンダに、あたたかい、まなざしを、そそがれていたが、やがて、その脇を静かに歩まれて、村を出て行かれた。

「さあ、わたしからなら、受け取ってもいいでしょう。つらい気分を除くために」

そう、およめさんにいわれて、カンダは、なおさら、心を固くした。

「ぼくには、お金がたくさんあるんだ。

そんな実など、何の役に立つんだ。こめつぶひとつ買えないじゃないか。

お金さえあれば、なんでも手に入れることができる。そのお金が、ぼくにはあるんだ。

この大切なお金。ぼだいじゅの実なんかより、ずっといい。お金だ、お金」

カンダは、お金を隠すところを考える。

だが、天井にかくせば、ねずみが持つていくのではないか、床下に埋めれば、犬が掘るのではないか、部屋に

おいたら、泥棒が盗んで行くのではないか、およめさんに預ければ使ってしまうのではないか、と心配だ。

どこも、安心なところがない。そうだ。

いつも自分が持っていればいい。

どこへ行くにも、お金をザクザク。

その重いことといったら。

持つ手は、しびれて、ビリビリ。

足は石を引きずっているようにズルズル。

道を歩いていると、前から来る人が、お金を取ろうとしているのではないか、後からついて来る人が、ひったくって行くのではないかと、あっちへキョロキョロ。こっちへキョロキョロ。その忙しいこと。

足は、フラフラ、目はクルクル。

カンダは、とうとう目が廻り、足が動かなくなってしまう。

薬をのんでも、なおらない。

どうしたら、いいのであろうか。

そんなこと、かんたん。

だれでも、わかっていることだ。

「あなた、どうかお金のことなど忘れて下さいな。身体の方が、大事なんですから」

「そうだよ、おとうさん。早く元気になってよ」

およめさんと子供は、看病した。

しかし、今となつては、もうおそい。

ぼたいじゅの実を、にぎらせようとしても、カンダの手は動かない。

自分でつかもうとしても、目が廻ってつかめない。

どうもこうもない。

こんなことなら、あの時、お釈迦さまに、
「ありがとうございます」といって、素直にもらっておけばよかった。

「カンダが、病氣なんだって」

村の人たちが、手に手に、ぼたいじゅの実を持って、集ってきてくれた。

「痛みを、抜いてくれる実だよ」

持ち寄ってくれた、ひとつひとつの実がカンダのまわりで、輝いた。

「なんとまあ、ふしぎな実」

みんな、目を白黒。

「おとうさん、ぼくの実だよ」

子供が、実をさし出した。

おどろいたことに、カンダは、それをしっかりと、にぎったではないか。

「よかった、これで治る」

よろこぶ声。

「ほら、みなさんが、こんなに案じてくださっているのよ。元氣になって、ご恩返しをしてちょうだい」

およめさんの実も、お日さまのように輝いて、カンダの目を覚ました。

目も、廻らない。

その時、カンダのポケットの中から、一段と明るい光が照り出た。

それは広く大きく、みんなを、はげますようだ。

人々は、目を見張りながらいった。

「カンダだけはお釈迦さまから、ぼだいじゅの実を、もらわなかったはずなのに」

そのことを知っているのは、お釈迦さまばかりであ

る。

村を去られる時、そっと実を、カンダのポケットに入れてくださったのだ。

あるいは、心のポケットの中へだったかもしれない。そして、なぜ、カンダの実が強い光を放ったのか。

それを知っているのは？

光のほとけアミダさま。

ぼだいじゅの実に糸を通して輪を作り、村の人たちは歌う。

お釈迦さまの教えは、ポケットの中

いつでも、だれでも取り出せる

光り輝く、ぼだいじゅの実

苦しいことも、楽しいことも

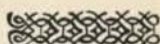
ぜんぶ知っている、ぼだいじゅの実

暗い道こそ、明るく照す

光り輝く、ぼだいじゅの実

(おわり)

浄土句集



三重 山田 うた

母の忌や關伽汲む桶に萩こぼれ

評 墓の井戸のあたりは萩叢があつて、咲

き乱れているらしい。仏に供える水を汲みたる水桶に萩がこぼれている。街中にこんな静かなところもあるのである。

福岡 服部 光代

風鈴のしきりに鳴りて雨となる

評 風鈴の風にしては強すぎるが、熱い夏

であるから涼を運んでくれるばかりでなく、水不足の町に雨まで降らしてくれるとは。

東京 小笠原香祥

木犀の厚く散り敷く雨の坂

一田牛畝選



評 雨の木犀は散つて掃かれず、厚くその

まま坂道に重なっている。散敷いている金色の木犀は雨のために香り高く、坂道なればあたりは静かならん。

福岡 高良 慈風

百葉とたしなむ老の温め酒

評 酒好きな人に言わせると酒は百葉の長

と申して、温め酒は老の身を暖めてくれて、よく眠ることも出来るわけで、実に葉だ。

東京 栗原とも子

寺苑みな白萩ばかり虻も来て

評 萩の寺とも申す可きならん。白萩は紅

萩より好かれるのである。天気も上々で

虻も来ているのである、月夜ともなれば狸も浮かれて踊るならん。

秋彼岸無縁の墓に供華頌つ
東京 真野よし子

評 無縁墓は参詣する人もなく供華もなく

淋しいのである。その墓に花を頌けて供えられ、仏のよるこび如何ばかり。秋彼岸であれば春彼岸より淋しさを誘うらしい。

福岡 藤村八千代

頼まれしことも忘れて老昼寝

評 年取ればすべてのことを忘れ勝ちとな

る。大事な事を頼まれていながら、まだまだ時間があると思つて昼寝していると約束の時間は過ぎて仕舞っていた。

福岡 荒牧 還愚

父の歳遙か越しけり秋彼岸

東京 吉田ゆきゑ

ハンカチの柄に夏草選びけり

福岡 上滝津弥音

傾斜垣紅萩なだれ風にゆれ

三重 森 静枝

ふる里の海に泳ぎの吾子を守る

東京 蒲尾衣有子

茸籠^{茸かご}や京のたよりを待ちわびて

東京 吉原登起子

こゝも亦いつも来る道萩乱る

東京 真野 竜

地藏尊尋ね尋ねて赤のまゝ

東京 田中 秀代

三門の鳩一列に天高し

東京 阪入志津枝

野仏や刈り残されし曼珠沙華

東京 猪瀬 幸子

色鳥や塀に二足のベビー靴

福岡 高良 幸代

早起の庭に小さき虹立てり

東京 栗原やえ子

邯鄲^{かんたん}を耳すませて聞くことに

東京 鈴木 葉子

御和讃の流れ楽しき秋彼岸

東京 末常てる子

露草のひっそり咲ける庭の隅

東京 細田 初枝

竹の春甘酒店の赤き旗

山口 上野 明達

夕顔の香り清楚な堂の縁

群馬 島津 か寿

こゝよりは尾花の阻む古い道

山梨 青山富貴江

夏の席八ッ手の葉蓋^{はだか}してありし

京都 安藤 寛

庭静か泰山木の崩れ落つ

福岡 釈河野ねはん

京の友加茂の茄子とてお土産に

大分 丹羽 難中

霧深し漁火^{いざな}近くまのあたり

福岡 前田 秀峰

パンコック寺又寺と汗の旅

福岡 林 澄山

雪隠^{ちゅうけん}はわが安息所香涼し

福岡 世利 展雄

採石の傷あか／＼と夏の山

湯豆腐や師僧に似て来嗜^{たしな}も 一田 牛畝

表紙のことば

「金昌寺の慈母観音」

大西耕三

金昌寺は秩父盆地に点在する三十四カ所の観音霊場の第四番目の札所で、多くの石仏のあることで特に知られている。

昔は山門前に参道が通りなり、朱塗の堂が山麓に巧妙に配置された景観は札所随一の眺めであったと云われる。

現在は山麓一帯に民家がたてこみ、裏山一帯に配された四十余棟の小堂宇は失われ、昔

時の景観は境内を写した版木によってのみしのばれる。

山門から六角堂、そして本堂へと石仏は建物の周囲をうずめ尽くし、その総数は千数百体と云われる。昔は三千八百体つくられたと伝えられ、現在でも時々谷間から発見されるそうだ。

これらの石仏の寄進者は江戸をはじめ、関

東一円に及び、その職業も多彩だが、特に江戸の商人が圧倒的に多かった様である。

観音堂の前に慈母観音（子育て観音）が安置されている。寛政四年江戸通油町の豪商吉野屋半左衛門の寄進によるもので、石仏中の傑作である。礼拝像としては珍しい、炉端の母を連想する温和な、親しみやすい姿である。両足をのばして、乳房にたわむれるあかごをかかえている姿はあまりにも現実的で、どこか家庭でも見られた、やさしい母親と、それにすがる無心な幼児の姿である。

蓮台にカエルの彫刻があるところから、「ミカエル」のクリスタン像ともいわれるが確証があるわけではない。よく見ると聖母マリアがキリストを抱いた姿とも見えないこともない。この像は現在でも秩父地方の人々に深く信仰され、通称「子育ての観音様」とよばれている。

某日の午後西武池袋線の車内でのこと、横に座っていた親子連れの会話が耳に入った。四、五歳位の子供がチューインガムを口に入れ、その包紙を床に捨てようとした際、その母親は「Aちゃん、その紙は捨てないでね。あとでガムを捨てる時その紙に包んでポケットにしまっておくよ。外に捨てたりしては駄目、ごみ箱にちゃんと捨てるのね。」やさしく諭す母親の会話を聞いていた筆者は得たりとほくそ笑んだ。

近頃子供のしつけのなっていない若い母親達が多い中で何と心良い会話かと。

幼時期に社会人としての基本的な公德心を徹底的にたたきこんで置くことが、如何に大切であるかを、近頃の世相の中では特に痛感する。

浄土宗文献センター一年有半覚え書き

三輪晴雄

(仏教大学浄土宗文献センター主任)

本誌第四五巻第十一号に前主任、堀隆広氏は『教化資料あさり雑記』の一文をものにされ、当センターの設立の経緯と粒々辛苦し資料収集にあたられたことを述べられた。

就任後一年半あまり、その間の活動は前任者に比して余りにも小さく、これまで知り得た一知半解な論を振りまわしても空理・空論に終わるであらうし、またわたくし自身その器量でもないことを充分に承知している。しかしただ浄土宗文献センターは、仏教大学の建学精神を体して設立されたものであり、ひいては宗門の骨格とし

て発展しようとする研究所であるところから、熱意のみは人後に落ちないと自負するところである。そしてその責を負わされたところの一端を記し、今後多くの協力者を得べく今日までの足どりを記し、また小さな活動をあらためて確認し明日への糧とし、編集者の求めの責をふさぎたい。



堀氏からの引継ぎとその蒐集資料を目のあたりにして、まずわたくしの身構えはあまりにも貧弱であり、ま

さに徒手空拳という表現がもっとも適しているのであった。ままよと自分自身を白紙の状態にし、まず取り組んだ仕事が一十平方メートルのうちに収められた資料を手取ることであった。背のびをし腰をかがめそこで手にした資料から全体を俯瞰したとき驚きとともに大いなる啓示を得たのである。それは八十平方メートルを有効に活用し、資料が体系をもって整理・保存されていたことであった。すなわち浄土宗文獻センターのあるべきように進むべき姿が汲みとれたことである。前任者が語らずして示したこの整理・保存の炯眼に謝しつつ年次計画を六月を期して遂行することに意を決したのであった。

まず、宗勢調査にもとずいた寺報調査アンケートの集計と分析であった。これは堀氏が中途まで計画されたことであり、後事を托された重要な引継ぎ事項である。そしてこの調査分析をもってその現況をありのままに伝えようとし「教化リサーチ」第二号の特集記事を編集したのである。しかし、思い入れと企みは齟齬し、疑問点のみが増幅されたことは否めない。これも付け焼き刃のようなどころに起因することはいうまでもない。それからまた「初心に還れ」とばかり八十平方メートルのなかを身も心

も屈曲伸張したのである。この間、十一月二十二・三・四日仏教大学で開催された「浄土宗教学布教大会」に協賛し開期中に資料の展観を供することとなった。ここで以前に発行した目録に追加・補遺のかたちで第三号の目録を刊行したのである。この目録をもって九一一部の雑誌・寺報・ハガキ類が網羅されたことになる。できあがったこの目録を当センター協力者に送付したところ欠号を補うべく資料が送付されてきたのである。この時の喜びは今も忘れることができない。これは備忘録として編んだものであり、予想だにせぬ反響とともに当センターの活動を語らずして注視している方々があったことを知ることができたのであった。このことをまた一つの契機とし「教化リサーチ」を今夏四号まで刊行し来たったのである。



「教化リサーチ」が機関誌として定期刊行を今日まで続けることができたのは巻末綴込みハガキによって教示・意見・感想が多く寄せられたことによる。

はがき伝道の実例を可能な限り広く蒐集の上、系統的に整理。簡潔な要約は、これから新たに文書伝道を始められる寺院にとってはよいモデルを示し、これまで既に実行なさっている寺院にとっては反省と比較研究の上にまた新たな出発となるでしょう。私どもの拙い文書伝道を散逸することのないよう大切に保存下さるだけでもまことに有難く深く感銘しております。

(原文引用)

と、創刊号は快挙をもって迎えられ、機関誌の意図するところと当センターの歩んだ道の正しかったことを確認できたのである。

文書伝道は派手のように見えてきわめて地味な仕事で、作っている本人が一番よく読んでいるけれど相手の心に響くのはホンの僅か。がっかりすることが毎度。けれども根気よく続けて行く以外に拓ける道はない。けれどもファイトもまたそれだけに湧いてこようと思います。昭和二十一年、敗戦直後乏しい物資のなか荒んだ心を温めあおうとワラ半紙、ガリ版刷り、

インクの匂いを嗅ぎながら手から手へ配り歩いた時の苦しく楽しい仕事は今も忘れません。初心は決して忘れられるものではありません。 合 掌 (原文引用)

二号刊行後に寄せられたもので当センターに収められたこの資料は、赤茶気てインクの匂いを嗅ぐことはできないが、時間の重みと血のかような気を今も漂よわせている。三号四号と重ねるうちに、今、文献センターは何をなし、そして何を問い続けねばならぬかが朧げながら見えてきている。

地方寺院が単独で精一杯やっている記録が後世に残るような気がします。辺境で少数の人を相手に小寺を護持しお念仏の旗を掲げて細々と存続している私共底辺の寺こそ宗祖の意に一脈通ずる様な気がします。

(原文引用)

祖意に適う気概が当センターにあるか。その存立・意義が問われているようであり、ひいては、教団は教化を骨格とし、教化は教団の皮肉であって、そこに血肉の躍

動——実践課題——があるのかが問われ、実践課題は教団・教化が歴史とともに歩んだ足跡であり、それをしっかりと受けとめているか。寄せられるアンケート葉書から聞こえてくる赤裸々な教化実践者の言葉は耳底をいつも打つのである。



アンケート葉書にいつも寄せられる要望は文書伝道実践者の交流会であった。当センターも机上の空論に了ることの反省をし、十月下旬「文書伝道・教化資料作成者懇談会」（仮称）を実施した。ここから一層の啓発を受け誌面充実の方策を計りたい。



就任以後一年有半、その当初は前任者の意を踏襲し積極的な姿勢をと思ったりしたのであるが、刊行の回を重ねるうちに微塵にもこの企みが打砕かれたというのが今日この頃である。積極果敢に思いながらもわたくしの器量では不可能である。この誌面を借りて多くのご協力者を望む次第である。また、現状を充分に把握し、巨視

的な視野に立っての「浄土宗文献センター」のあり方が今後問われるであろう。研究員・職員を含めていまそのことに取り組み模索中である。設立以来十年目、節目でもあり、設立目的である「仏教教化の総合研究」への階梯としてこの覚え書きを草した次第である。多くの示教・叱正を請う。

※仏教教化の総合研究を目指し資料蒐集に努めています。各寺院で所蔵される宗典籍・文書資料の調査・整理をご希望の方はご一報下さい。また、どのような反故資料でも結構です。廃棄処分せずにご送付下さることを願います。送料等、一切の費用は当センターが負担をいたします。

連絡先——〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町96

仏教大学

浄土宗文献センター宛

詩

詩

詩

寒

い

冬

清^{きよ}
川^{かわ}
宗^{そう}
治^じ

春、夏、秋と過ぎて
今は、寒い冬

冷たい風が

私の体を切って行く

冷たい風が

私の心を通って行く

寒い季節

冷たい冬

——でも、そんな中で
私の体と心は

暖かくなろうと、する



念佛ひじり三國志

(空)

―法然をめぐりて―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



法然の变らない決意を聞いて、門弟の念仏ひじりたちはいちように昂奮をおぼえて吉水の禅室を退出していった。

「遼西どの」

安楽房は呼び止められた。若い覚明房長西であった。

長西は今の会議には列席していなかった。

「何か……」

「会わせたい者がおります」

若い門弟たちの「溜り」になっている下ノ房の方へ急

ぐ。

大部屋の片隅に僧形の少年が両膝を抱えこんでうずくまっていた。安楽房には未知な少年だった。

「この者、縁道と申します。光堂の明遍さまからお預りしました」

「どうした？ どこか病んでいるのか」

うなだれた少年僧の横顔には生気らしいものが全くな

い。

「ついさっき戻されてきたのです」

「戻されてきたとは？」

「検非遣使の庁からでございます」

少年僧は、不当に逮捕された東山の犠牲者の一人だっ

たわけだ。小者や童子たちを理不尽にしょつ引いていったのである。

「そうだったのか。おぬし、ひどい目に遇ったのだな」

返事を聞くまでもなかった。顔を上げた少年僧の両眼は果実を押しつけたように腫れあがっていた。唇も裂けて、血こそ止まっていなかったが、ざくろ状だった。

「いったい何を問責されたのだ」

「それが、この緑道には身におぼえないことばかりだ
「すでに長西が訊問を済ましたらしい。」
「身におぼえないこととは、いったいどんな内容なんだ」

「ようやく少年僧は醜く裂けた唇を縫いつくろうようにして言葉を発した。」

「光堂にいた尼僧たちのことです」

「その尼僧たちが？」

「誰の手で出家させられたのか、戒師の名を言えと責め立てるのです。私には誰を戒師として出家したのか、さっぱり見当もつきません」

「うむ……」

安楽房は注意深い視線を拷問でただれた少年僧の顔へ集中した。

「出家の戒師は法然お上人さまだったのだろう、そればかりをくり返します」

「同じ手口ではないか。すべてをお上人の責任に帰そうとして、こんな童子までも痛めつける」

長西をふり向きながら、嘆いてみせた。

「如何にも。どこの尼僧ともわからぬ者をお上人さまと結びつけてしまうのです。ところで緑道。その尼僧とやらは以前から光堂に在籍していた者なのか」

訊問の追いかけて長西がする。

「二人とも、つい最近つれて来られた尼僧たちです」

「つれて来られた？ 誰に」

「あのお方は……」

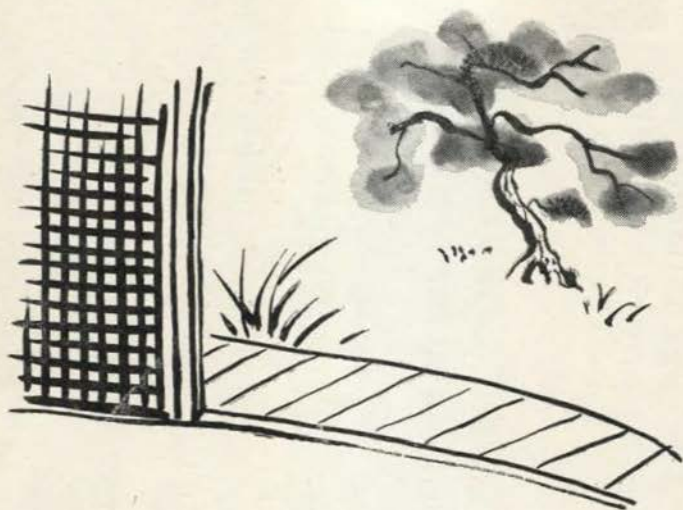
少年僧緑道は記憶をたぐり寄せようとして、殆んど開かない臉を無理にこじあげた。

「誰にだな」

安楽房はそれを助けるように声音を優しくした。

「明遍さまがよくご存じのお方でしたが。名前がどうしても思い出せません」

＜尼僧たち＞



「僧か、公卿か」

「僧のようでもあるし、貴人みたいなお方でも……」

やはり、あいまいだった。

「まあいい。それでおぬし、結局はどうだったのだ」

「どうって」

「法然上人さまの手で出家した、と申したのか」

「……そう言えば許して帰してやると申されたので」

「うむ。それで釈放されたというわけか」

「いけなかったのでしょうか、あんなことを言って。お上人さまに何かご迷惑が及ぶのではないでしょうか」

少年僧緑道は悲しげな声を洩らしたが、醜く腫れあがった顔は「表情」を作ることができなかった。

「いやいや、おぬしに何の罪もない。知らずに言ってしまったただけだ。悪いのは、無理にそれを言わせて悪用する奴らだ」

安楽房はなぐさめた。

そのあと長西に提案した。この少年僧を自分が光堂まで送り届けよう。拷問の傷は一刻も早く手当てをしなればならない。それと、少年僧が口にした二人の尼僧たちの正体も知りたかった。

京の冬空は暮れようとしている。いまにも雪が舞い落ちてきそうで、大路を歩く爪先から寒気が泌みた。

「緑道ではないか」

安楽房を光堂にむかえた明遍は、つれの少年僧をしげしげと眺め、やがて驚きの声を発した。余りにも変り果てた容貌だった。

「この子はな、ひどい目に遇ったのだ」

安楽房は事情を説明したあと、

「この寺にいた尼僧たちのことで拷問されたらしい」
話題を核芯へふれていった。

「尼僧たちの……」

「明遍どの、ご存知であろうが。その尼僧たちは最近ここへ来たらしいが誰が？」

「尼僧たちのう……」

明遍は言葉を濁してしまふ。

当惑しているのだ。

緑道があつた松虫、鈴虫のことで拷問を受けたらしいことは、即座に察しがついた。もちろん密通のことであろう。とあれば、自分も同罪ではないか。明遍は俄かに警戒の姿勢をつくらった。

「ひどい傷だ。あちらで手当てを受けなければならぬい」

緑道を本坊の方へ連れ去った。安楽房から隔離して事情を探ぐっておく必要があった。

安楽房は光堂へあがりこむと、ひとり明遍の帰りを待つことにした。

隠棲の持仏堂――

安楽房は自分らと明遍との生活レベルの差を痛感しないわけにはいかなかった。この光堂は世を捨てた明遍の隠棲地と聞いた。しかし、おびただしい蔵書や手まわりの品々は自分ら「ひじり」暮らしでは及びもつかぬものばかりだった。高価な品質の什器が並んでいる。

やはり明遍僧都は「貴人」なんだなあ、と差別感をいだかずにはおれなかった。この差別感、仏法そのもののへ組みし方にも異質となってくるのではないだろうか。

安楽房の思惟は、さらに政治面へ拡大していった。京と鎌倉の政治だ。そこには大きな落差がある。

後白河法皇に仕えた安楽房だ。京の宮廷は隅々まで知悉しているつもりであった。また念仏ひじりとなつてか

らは足繁く鎌倉へ往還もし、武家政権の内情にも通じている。

土臭さい、野盗の集団もどきの武家政治。とりわけ現執権の北条一族は格式や美意識を徹塵も持ち合わせていない。例えば一族あい集って酒宴をひらくときも大根の塩漬けをかじりながら酒を飲む。会話も放声狼藉、各自が勝手にしゃべりまくる。その点、京方では万事に格式が先行した。生活の隅々にまで美意識が配慮されている。

この東西が一つになって、いわゆる公武が合体して、円滑に政治を進行させる。それは不可能なことだと断ぜざるを得ない。どちらかが他を喰い散らしてしまわなければ、政治に安定は訪れないであろう。

そして、法然が主唱する専修念仏は、みやびな京のものではなく、北条のあの荒くれた感覚を支える新しい思想なのだ、と安楽房は再確認するのだった。

「安楽どの」

明遍の声がはいってきた。

「おう、緑道は？」

「うむ。あちらでゆっくり休ませることにした。何もないが時分どきだ」

ともなってきた二人の喝食（かつじき）——番僧が夕餉の膳をととのえはじめた。

碗にはたっぷり赤粥が盛りつけられた。赤粥とは小豆を炊きこんだものだ。

この時代、常食は粥だったが、それを現代の粥と混同してはならない。水分の量が極端に少ないのである。柔らかい「飯」ぐらいに考えた方が正しい。現代流の粥は「汁粥」とか「湯粥」と呼ばれて病人食にあてられている。

豪華な小豆粥に色とりどりの漬け菜が添えられていた。茄子、菁根（かぶら）、水葱（なぎ）、冬瓜、蔓根……この冬場、京では一般家庭でも漬け物に不足する。それが明遍の隠棲生活にはたっぷりとたくわえられている。持仏堂の什器類からも推察できたように、生活の豊かさを物語っている。

食事中ゆえ、口数は少かったが、明遍の表情は明るか

った。少年僧緑道を問い詰めて、司直の追究が自分たちの情事ではなかったことを確認できたかうであろう。

「緑道が申していた二人の尼僧のことだが」

と明遍は食後の白湯をすすりながら切り出した。

「うむ。どこの尼僧か」

「安楽どのもご存知ではなかったかな。一条家で育って、そのあと近衛家にいた通称松虫と申す姫だ」

「何と。あの松虫！ はいま一人は妹分の鈴虫か」

「さよう」

安楽房の顔色が変わった。あの松虫、鈴虫だったならば、たしかに自分が立ち会って東山で法然手ずから落飾させた女人たちではないか。

「二人だけでこの寺へきたのか」

安楽房の声は狼狽気味だった。彼女たちなら、落飾は捏造ということにはならないのである。

「いや、さる男がつれてまいった」

「その男は？」

「四天王院の執行尊長僧都」

「ああ……」

悶絶してしまいたい。いちばん悪い男の手に落ちた、

と言うべきであらう。なるほどこれで善惠房証空が掴んできた情報も理解できるというものだ。法然を四天王院へ押しこめて鎌倉調伏の祈禱をやらせる――

「わしには、よくわからないが、何か困った事情でも」
明遍は、後鳥羽院の念仏禁断の動きを承知しつつもことさらにトボけて訊き返した。彼には情事の暴露の方が恐ろしい。いや、尊長僧都にはすでに告白してしまったわけだが、安楽房ら念仏ひじりたちの「逆襲」を警戒しなければならなかった。

「いや別に……そうだ。その尊長僧都がこちらへ女人たちをつれてきたときだが、どんな様子だったかな」

「どんな様子とは？」

「松虫や鈴虫の髪だが」

「頭巾ですっぽりと頭をくるみ、鈍色（にびいろ）の僧着をまといていた」

「頭巾のなかには？」

「あのあと、この寺に数日参籠していたのだ。有髪では許されない」

「完全な尼法師の姿であったか」

安楽房の語調に安堵感がふくまれてきた。

明遍は、めくるめくような場面を回想している。それは法体姿の女人が全裸にむかれ、肉体の隅々まで享樂し尽したあの秘密絵巻であった。

もちろん、そんな秘事はおくびにも出さない。安楽房に知られたくはないのである。

「それはおかしい。わしはこの眼で、お上人があの人たちを剃度なさった光景を目撃している。黒髪をほんの二すじか三すじづつおろしただけだった」

「それがなぜ丸坊主に」

「尊長僧都は何か申していたかな」

「そう言えば、世をはかなんだ松虫たちが勝手に自分らで髪をおろしたというようなことを」

「だいたいお上人の剃度はいつも形ばかりのものなのだ。つね日ごろおしゃつてもおられる。女人の出家は心の落飾じゃと。心にまつわりつく煩惱慾念の髪を払い落して、信心の尼となる。よろしいか。信心の尼となるのじゃ」

「では頭を丸めたのは法然ご房の手ではないと申すのだな」

「如何にも。本人か、あるいは誰か別人が再度、髪をお

ろしている」

「それなのに、なぜ院の役人どもは緑道に、戒師は法然ご房だ、と言わせたかったのであろうか」

「松虫も鈴虫も禁中に仕える小女房じゃ。いわんや松虫は、主上の土御門帝が御執心の女人ぞ。それを法然が独断で髪をおろしたとあれば、禁中へ無届けでな、お上人に危害を加える恰好な口実となる」

「なるほど。いま院をあげて法然ご房をねらっているのは間違いない。ご房を鎌倉北条の精神上の指導者とさえてみている」

「そうであろう」

「わしは、すでにあの若い長西というひじりに申し入れている。法然ご房は都を離れられたが得策であるとな」

「明遍どの。あの松虫たちがなぜ尊長僧都の手中へはいったのか。その経路に見当はつかぬかな」

「松虫たちが尊長の手中へ？ それは院を通してであらうが」

「主上の御懸想をあれほど嫌った松虫たちがなぜ後鳥羽院に」

「安楽どの。一介の世捨て人にそのようなやこしい事

情がわかる道理はあるまい」

たしかにそのとおりだった。

「では、もう一つ聞きたい」

安楽房の眼光に鋭さが加わった。深い地点から明遍を凝視してきた。

「何のことかな」

額に汗がにじんだ。明遍はおのれの秘事を射すくめられたような戦慄をおぼえた。

「明遍どの。おぬしと尊長僧都との関係だ」

「尊長との関係？ 何もない」

問題が松虫たちとの情事ではなさそうなので、強気が回復してきた。

「何もないことはあるまい」

「松虫たちのようにだいいじな『玉』を、尊長はおぬしに托していったのだ」

「この寺へ預けにまいった」

「この寺に現在、院内とつながるような僧がおらぬではないか。明遍どの、おぬしのほかには……いや、何も非難しているのではない。一つだけ念を押しておきたいのだ」

「どんな念押しを」

「わしが頼んだとき、その旨を尊長僧都に通じてもらえ
るかどうか、ということだ」

「頼みの内容によるがな」

「そんなにむずかしい内容ではないはずだ」

安楽房は腰をあげた。夕餉の饗応をあらためて謝し
た。

もう戸外は深い闇になっていた。

「今宵も別時念仏かな」

見送りに出て、明遍は言った。

「うむ。別時を結ぶ機会もゆき先、そうたびたびはあり
そうにない。今のうちにせつせと勤めておかねばな」

安楽房は吹きつゝのる木枯らしの底へ吸いこまれていっ
た。

明遍は背中にべっとりとかいた汗を、壁板に身をこす
りつけてぬぐった。その汗は、最後まであの秘事を安楽
房に見破られなかった瀬戸ぎわから噴出した汗であっ
た。

しかし明遍は、求法者としてそんな我が身を深く恥入
った。あの安楽房に比べて自分などはまっ赤な賈者とい

うほかはあるまい。

三

安楽房邊西は夜もふけた太秦の野を、ひとり歩き続け
る。もう広隆寺の楼門にゆきあたりそうなはずだが、い
つこうにそれらしい形影がない。

はて、道をたがえたかな。

近ごろ太秦の夜道にはとんと無縁だった。仁和寺御所
の女房たちを集めて興行した六時礼讃も中絶している。
御所の母公、後鳥羽院後宮の坊門局と安楽房との仲をし
きりに嗅ぎまわる那智ノ検校長巖らの眼を警戒したため
である。

だが今はそんなことを言っておれなかった。一刻も
早く広隆寺にいる盲目の琵琶法師生仏に会って、あれ以
後の経緯を聞き出さねばならない。事と次第によっては
仁和寺の母公にも。

黒い人影が前方からやってきた。こんな刻限に野づら
をうろつくとは何者であろうか。安楽房は充分に気をく
ばってすれ違う間隔をたもって、やりすごさせた。

五、六歩いってから人影は立ち止まった。

「お出家だったか」

農夫である。

「広隆寺に参籠したいと思ってまいったが、道を見失った」

「広隆寺だって。お出家、そりゃ方角が反対だ。こつちだ」

と安楽房が今きた道の方を指さした。

聞けば途中の古池の手前で北へ折れるところを見すごしてしまったのだ。

「おぬしはこのあたりの者か」

農夫と肩を並べて歩きだした。

「ああ」

「こんな夜ふけに何の用事だ」

「罾を見にいった」

畑荒しをする野狐や狸を捕獲するために罾が仕掛けられている。兎の肉などを餌に置いた穴だ。

「今夜、獲物はなかったな」

「見てのとおりだ。餌だけはとられたよ。近ごろは奴らもなかなか利口になりおった」

「利口になった、か……」

「どうも狐だな。罾の上の餌を、尻尾で引き寄せるようだ。現場を見たわけではないが」

「尻尾を使うか。罾を仕掛ける側も考えないといかん。いまにクソだけを穴の底に残しておく狐が出てくるかもしれないぞ」

安楽房は声を立てて笑った。

こちらも敵の仕掛けた罾に乗じて、餌を奪いクソを残してやる手はないものか、と胸中でふと思いがいたりする。

笑い声のなかで農夫とわかれた。もうそこは古池のほとりだった。

道を見すごしたのも無理はない。古池の向う側と同じような土手がそこへ新たに築かれていたのだ。池辺に添って平坦な道を、とばかり思いこんできた。

池が尽きて林道になる。奥に広隆寺の楼門が浮かんだ。

「生仏どの」

境内へ踏みこめば闇でも四通活達だった。生仏が寝ている殿司の下へきて板葺をこつこつと叩いた。

「誰？ ああ……」

盲目だけに声を聞き分ける能力は常人を超えている。裏口をひらいて安樂房を招じ入れた。

こんな夜ふけの訪問を詫びてから、すぐに本題へはいった。

「この間つれてきたふたりの女人のことだが」

「近衛家の小女房とかいう松虫どの」

「と鈴虫だ。未だ当寺にいるのかな」

「いや、あれからすぐに仁和寺の方へおつれ申しました」

「たまたま参詣にあらわれた仁和寺の母公——坊門局に預けたというのである。」

「母公のもとへいったのか。それから」

「さあ、未だあちらにいるのではないでしょうか」

「なるほど……」

これは明日にでも坊門局に面接して実情を聞き出さねばなるまい。

もちろん松虫と鈴虫が光堂の明遍に預けられたことは判明している。安樂房が確認したいのは、尊長僧都がどんな手くだを用いて彼女たちをつれ出したか、である。

生仏と寝床を並べてやすむことにした。当然、どちらも寝つかれなかった。話題は念仏教団の前途に集中した。生仏は東山吉水の禪室に泊り、師の法然と親しく言葉をかわした朝の思い出を語った。

「私がこの境内である朝、尾長鳥に襲われたときの話を申上げたのです。梢から私めがけてまっしぐらに翔けおりてくる鳥と盲目の私ゆえ、その姿はとらえられませぬ。しかし、殺気、鳥の敵意ははっきりと感じ、袖で顔をおおうたのです。すると尾長鳥は不思議な顔をして、私のかたわらをかすめて飛び去りました。そう申上げると……」

「尾長が不思議そうな顔をしたことも、生仏どのにはわかったのか」

「法然お上人さまも同じようなことを訊かれましたよ。」

「もちろん気配でそれはわかるのです」

「お上人は何かおっしゃったかな、そのことについて」

安樂房はややいら立たしげに話の先をうながした。

「はい……生仏よ。お前は尾長鳥の攻撃に身をかためたと言ったが、防備をしただけで抵抗のかまえを示さなかったから、鳥は殺気や敵意を失ったのだと」

「抵抗のかまえをしなかったから殺氣や敵意を失ったとおっしゃったのか」

「そうです」

「なるほど……」

考えこんでしまった安楽房遵西。

生仏もあとの言葉をつながなかった。

長い沈黙が流れた。お互いに相手が寝入ってしまったのか、と思ったほどである。

「おぬしが吉水に泊った晩とは、たしかわしがあの善恵房と言ひ争った日であつたなあ」

「さようでございます。九条殿下のお別時に招かれなかつたとかで」

「うむ。慈円座主が列席なされ、善恵房が座主は専修の徒とは同座なされぬとか申したことに、わしは腹を立てたものだ。ではおぬしらは専修の徒ではないのかと」

「法然お上人さまはおっしゃられましたね。専修は一義である。しかし、それは阿弥陀仏の側に立った場合で、人間の側に立てば三義にも五義にもわかれると」

「生仏どの。それ以上、申されるな。かえりみて恥かしい。お上人は断を下された。わかれるのはかまわない。

しかしどちらが先だ、どちらが正しい、と争うのは間違いだとな。そのとおりなのだ。近ごろこの遵西にもようやくそれがわかつてきた」

「……」

向つ氣が強く、何ものにも屈しない安楽房が、今夜はなぜこうもおだやかなのだろう、と生仏は見えぬ眼でそつと隣りの床をうかがつたりした。

生仏は話題を転じた。

「今日はどちらの方へ？」

「さっきも申したであろう。光堂へ明遍どのをたずねてきた」

「そうですか」

「生仏どの。あの僧都を知っているかな」

「明遍さまですか。はい、何度かお会いしております」

「どう思うかな。明遍どのの信心を」

「さあ……でもこれだけは言えるでしょう。いま信心の上でいちばん迷つていられるのがあの僧都ではないでしょうか」

盲目だけに生仏の人間観察は鋭利な斬り口を持ち合わせていたかもしれない。

(つづく)

◎ 読者の皆様へのお願い —

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしました。その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただけてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま) (とめ下さい。)

一、枚数 四百字用紙五枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十七巻 十二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十六年十一月二十五日 印刷

昭和五十六年十二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

発展する浄土宗開教区

「法は人による。」

正法弘宣はあなたによって。古来、法は独り弘まるものではなく、人によって弘まるといわれております。

開教使募集

資格 浄土宗教師資格取得者(見込み可)にして

浄土宗開教使養成機関の履修者

赴任先 ハワイ、北米(ロスアンゼルス)、南米(ブラジル)

のうちの希望地



浄土宗南米別院本堂

詳細についての御照会は――

〒605 京都市東山区林下町400

浄土宗開教振興協会事務局

浄土宗宗務庁内

TEL 075(525)2200(代)